

元八王子のむかしばなし

このむかしばなしは、菊地 正著 東京新聞出版局が昭和六十二年に発行された「どんどんむかし（八王子・日野地方の昔話）」と平成三年に出版された「どんどんむかし十一か月」の中から、元八王子地域に関係のある昔話を抜すいして編集したものです。広報紙「もとはちおうじ」の取材や編集時の参考に供していただければ幸いです。

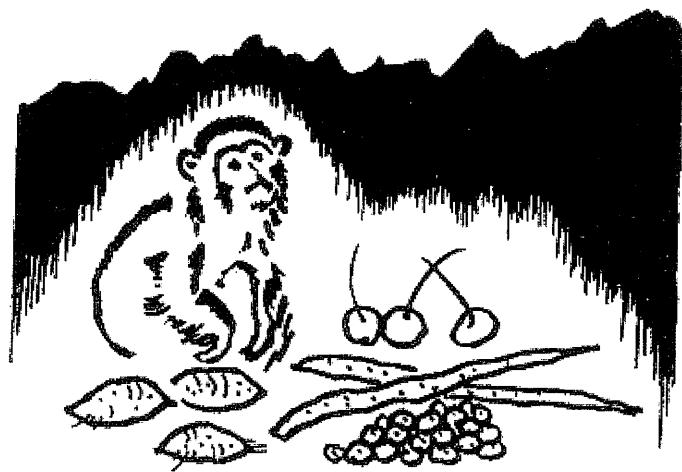
ご存じのとおり、「どんどんむかし」は、昭和五十六年からショッパーに連載され、郷土に対する愛情と、土のぬくもりを守ってくださる人々と、この地を新しい住居とされた方々の、まるやかな関心などに支えられてこれらが出版されたものです。

まだまだ、路傍の石仏に、旧家の土蔵に、風の峠や辻の雑草の影にも昔話がひそんでいるかもしれません。

……自然と歴史のふれあうまち 元八王子……取材の傍ら面白い昔話を掘り出してください。

□ 猿塚	八王子村→神宮寺村	1	□ 三人笠地蔵	元八王子村・妙觀寺	13
□ につこり如来	横町・極樂寺	2	□ 縁起まんじゅう	四ツ谷・お諂訪さま	14
□ 夜遊び地蔵	慈根寺→川村・雲光寺	3	□ 龍神と弁天	下一分方村・西蓮寺	15
□ 僧正さま不動	八王子城の落城	4	□ 虚空のしらべ	二分方村・大沢川	16
□ 下原鍛冶	山本家一門	5	□ 六右卫門觀音	一分方村・無量院	17
□ 叶屋めしや	叶谷	6	□ 華川の虫	花川・一本榎	18
□ 豊毛ヶ谷	川村	7	□ 大狗の壘折れ	横川村	19
□ 山だち姫	川村	8	□ 法力和尚	二分方村	20
□ 高鳴りの鷲	元八王子村・八幡宮	9	□ あついで地蔵	元八王子・石神坂	21
□ 走り祈願	大桑寺村・叶野	10	□ 署取り如来	御靈谷・妙觀寺	22
□ 代官の難問	八王子の在	11	□ 代官ギツネ	慈根寺村	23
□ 鶴の森さま	上一分方村	12			

猿塚



元八王子村が神宮寺村といわれていたころ、深沢山のふもとに、猿塚と呼ばれる供養塚があつた。八王子権現社が、荒れはててしまつたとき、この地に足を留めて、再興なされた鉄山無心てつざんむしんというお方が野猿のために築かれたものといわれておる。

無心さまは、伊勢今泉の児玉氏の流れだが、出家され全国行脚しておられた。そして、深沢山に入ると、権現社再建を、祈願の行として、岩くつにこもられた。

厳しい修行のおりおりに、一匹の野猿が、木の実や山芋などを運んでくれた。

「野猿は、権現さまのお使いと聞いていたが、わしの修行を助けてくれるとは、ありがたいことじゃ」

ところが、満願の二日前に地震があり、それから、野猿は姿を見せなかつた。

満願の日、無心さまが野猿を探すと、哀れ、山道で岩に打たれて死んでおつた。

その後……、この猿塚に参ると悲しいこと、忌まわしいこと、すべて去る=サル=といわれたそうじや。

につこり如来



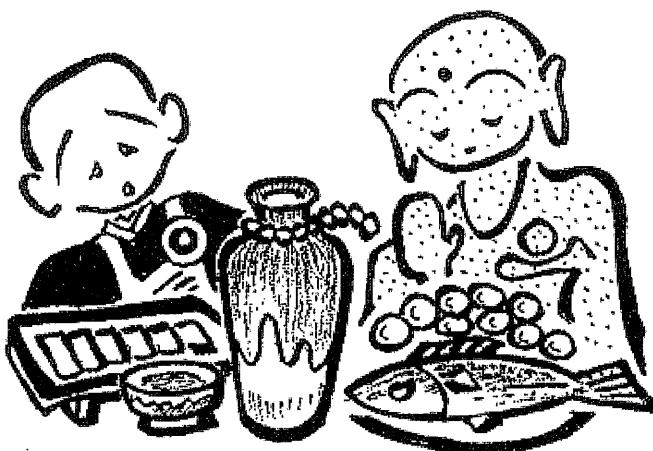
八王子の横町の極楽寺においての阿弥陀さまは、ちよつぴり歯をのぞかせていらっしゃるので、『歯吹き如来』とも、『につこり如来』とも呼ばれておる。この如来さまは、もとは元八王子村鳥居場の妙觀寺においてじやつた。あるとき、妙觀寺の法印さまの夢に、如来さまが現れ、「八王子の横町の極楽寺へ参るので、よろしく」と、おっしゃつた。

と同時に、極楽寺の上人さまの夢にもお出になり、「元八王子村の妙觀寺へ、われを迎えて参るように」と告げられたそうじゃ。

『同時の夢』というのは、あらたかで、尊いものじゃが、遷座なされたあとも、如来さまの、夢告げの冥利がつづいたといふことじゃ。

ところで、この如来さまにお会いして、お説法を受けているように感じる人は、『歯吹き如来』と呼び、笑つておいでのように見える人は、『につこり如来』と呼ぶそうじゃ。その人々の心根によつて、見方がちがうのも、深い趣きがある。

夜遊び地蔵



慈根寺から川村へいく道の山に雲光寺という寺があった。ご本尊の地蔵さまはなかなかの美男で、近郷の衆に敬慕されておられた。

ある年、陽気がよくなつたころから、地蔵さまが、夜ごと遊びまわるという、うわさがひろまつた。

「酒屋で、酒をねだつた」「料亭で、ただ食いした」「後家のところへ、忍んでいた」など……、まことにけしからん話じゃった。

うわさを聞いた、本山のご老師が、「仏といえど、罪は罪」といつて、ご本尊の地蔵さまを、本山の本堂の大柱にくくりつけてしまわれた。

雲光寺の住職は、あわててご老師にすがり、やつとご本尊を返していただいたそじや。

それからのちは、地蔵さまの夜遊びもなくなつた。

実は……、夜遊びしていたのは、雲光寺の住職で、この坊主をこらしめるために、近郷の衆やご老師が、「地蔵さまには、すまんけど……」といって、一芝居打つたというわけじゃ。

僧正さま不動

八王子のお城が落城したのは、天正十八年（一五九〇）六月二十三日のことじゃが、ちょうどそのとき、城中にあつて護摩修行をなさつておられたのが、大幡の宝生寺の頼紹僧正さまじゃ。伴僧は、八日市場の西蓮寺のご住職祐覚さまと二人のお弟子である。

寄せ手の軍勢が、ドドッと、攻め入り、三の丸、二の丸、本丸と、火を放つたので、たちまち、紅蓮地獄のさまとなつた。

二人のお弟子が、「この場は、いったん、引き上げられては……」と、すすめた。

けれども、頼紹さまも、祐覚さまも、微動だまなさらず、護摩修行をつけられた。

二人のお弟子も、意を決し、師に従つたそじや。

寄せ手の軍兵が、護摩修行の間に押し入つたとき、「あつ！」と、声をのんだ。

炎の中に……不動明王のお姿をいただいたように、僧正さまたち四人が、厳然と、座しておられたといふことじや。



下原鍛冶

北条氏照さまが、滝山城から、八王子城に移られたとき、城下にあつた鍛冶衆を、たいそう厚く庇護されたということじゃ。

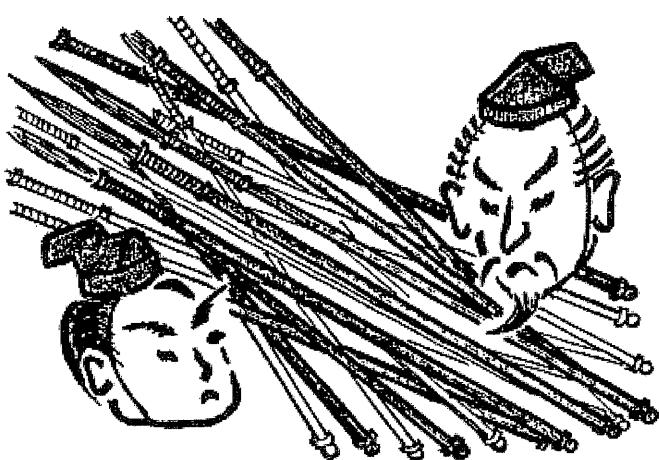
この鍛冶衆は、八王子城合戦のとき参陣し、大いに戦ったそうじゃ。江戸期に入つてから、幕府の保護もあつて、またまた盛んになつた。その中でも、下原に住む刀匠、山本家一門は、よく知られた。とくに、宗国、国重、周重などが傑出したおつた。

相州正宗の直伝であるといわれ、家康公から、千本槍のご下命があつたとき、見事に打ちあげたそうじゃ。

将軍家から、「名匠」の称号を認められ、江戸鍛冶奉行の最上席を得た。「天下の下原鍛冶」といわれ、代々その名がとどろいた。

それが……、のちに、あまり知られなくなつたのは妙なことからだという。「下原は、下腹に通じる」といつて、切腹と忌まれ、次第に衰微したとか……。

名匠が絶えたのは、まことに惜しまれることじゃ。



叶屋めしや…

大和田村の甲州街道筋に叶屋かのやという、大盛りで安いめし屋が店を出した。

叶屋という屋号をつけたのは、いいことがかなうようにとってことど、主人の佐七が大楽寺村の叶谷の出だつたからじゃ。

初めは、けっこう繁盛しておつたのじゃが、佐七がかけことで大負けし、首がまわらなくなつた。ばくちのカタに、店を取り上げられ、思いあまた佐七は、藏ん中

で、首をくくつて死んでしまつた。

その後、店を買い取り、めし屋をやろうとした者が何人か
おつたが、つぎつぎだめんなつた。

なんでも、ま夜中になると、藏ん中から、佐七の首が飛び出
して、うらみごとをいうのだそづじや。

めし屋が、空き家になつたら、こんどは、佐七の首は夜の街
道に飛び出した。

人のうわさだと、佐七の首は「うらめしや……」といつところ
の「めしや……」に、特別怨念がこもつておるようによ、聞こえる
ということじやつた。



琵琶ケ谷



川村の南の、琵琶ケ谷には、いまも、不思議な話が語り残されておる。ある夏のこと、ひとりの琵琶法師が、谷へ入つていつた。それから、琵琶の音が、聞かれるようになつたというのである。

人々のうわさでは、「八王子城合戦に参陣し、奮戦したという、もとは、名のある武将らしい」と、いうのじやつた。

この谷は、八王子城への間道だつたとか。

「法師の琵琶は、討ち死にしたものへの、鎮魂じやろう」ともいわれた。だが、また、「いや、八王子城が、わずか一日で落城したのは、この間道を教えた、うらぎり者がおつたからで、その、うらぎり者が、この法師らしい。法師の琵琶は、わびる心を、かなでておる」と、いうのじやつた。

いろいろな、うわさ話が消えるころ……、法師の姿も消えたそうじや。

だが……、夏草が茂るころになると、だれもおらん谷間から、琵琶の音が、風にのつてくるという。

山だち姫

猪(いのし)は、またの名を山だち姫と呼ぶのじゃが、まこと年を経た古猪は、山姫にも化身するといわれておる。

川村に藤右エ門どものいう山名主がおられた。学識も仁徳もあり、しかも、たいそう怪力だつたそうじゃ。

ある年夏、激しい雷雨のあと、山回りに出かけられた。すると、奇異な女が雷に打たれた大木の下敷きになつて苦しんでおつた。藤右エ門どのは、(ははあ、これが山だち姫じゃな)と気づかれた。

「お助け申す」と、渾身の力で大木を退けたそうじゃ。
よろこんだ山姫は「かたじけない。お礼に、なんなりと望まれよ」といった。

藤右エ門どのは、「山仕事で、一番の難儀は蝮(まむし)の毒。どうか蝮封じを伝授ください」と頼んだ。すると山姫は、「我が道に、錦まだらの蛇あらば、山だち姫に、捕りて食わせん」と歌つた。
さて……、この歌が、蝮封じの呪文として、なかなか、よく効いたそうじゃ。



高鳴りの鰐口

元八王子村の八幡宮は、八村八郷の鎮守として、里の衆にあつく崇拜された。

この八幡宮には、源氏の流れの横手右近正殿の恩女綾姫さまが、祈念奉納された、額や燭台・鰐口わだなどが納められていたそうじゃ。なかでも鰐口は、「高鳴りの鰐口」といわれ、たたくと、見事によい音色で響くので有名じゃった。

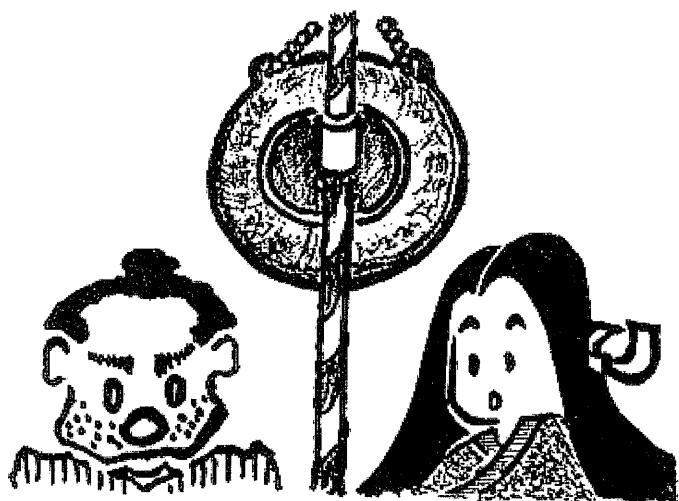
ところで、この八幡宮は梶原家にかかわりが深く、伝えられるところでは、源頼朝

公が、鶴岡八幡宮を造宮なさるときにつくられたものだが、どうしても頼朝公の気に入らず、廢宮となるところじゃった。それを梶原景時さまが拝領して、鎌倉から運んでこられたものだといわれておる。

梶原家に縁が深く、近郷の総鎮守でもあるので、宮の宝物もたくさんあつた。

それゆえ、しばしば盗賊に狙われた。だが、それもすべて失敗したそうじゃ。

そのわけは……。盗賊が近づくと「高鳴りの鰐口」が、いい音色で自鳴りして知らせたというのである。



走り祈願

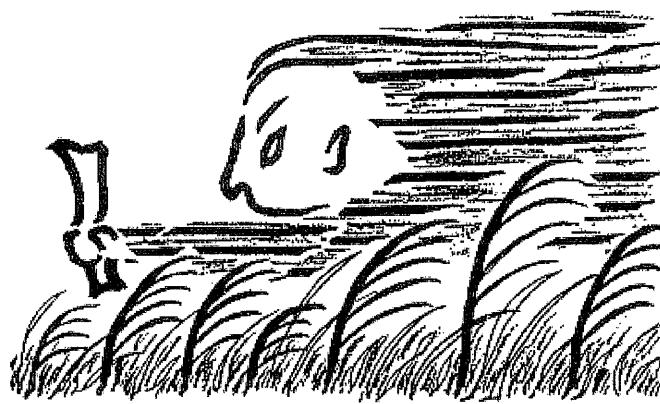
大樂寺村の叶谷には、すすきの原があつて、叶野かのうと呼ばれた。なにごとか、一心に祈念して走りぬけると、願いが叶かなうったということじゃった。

“走り祈願”といつて、お百度参りのように、何度も何度も走り通して、願いが叶かなうった人ひともあつたそうじや。

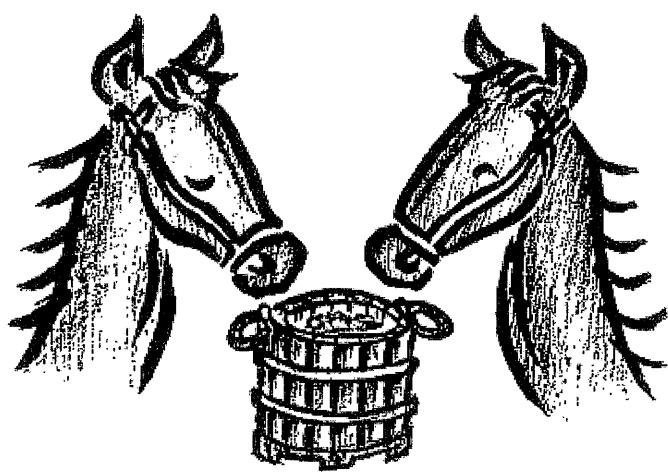
横川村に、定五郎どのという人がおつた。ある年の秋、風邪ふうえがもとで、重い病氣にかかるつてしまつた。女房のチカさんは、人のすすめもあつて走り祈願まわしをした。

すすきの原にも、厳しい北風が吹きわたるこ**うじやつた**が、チカさんは、走つて、走つて、夫の病氣快癒びやくゆを祈つたそ**うじや**。満願の日は、みぞれまじりの寒空で、叶野を走りぬけたチカさんは、力つきで倒れてしまつた。はたの者が氣づかつて、助け起こすと、やがて、目を開けて、「お薬師さまを見た」と、つぶやいた。そして、定五郎どのの病氣は、けろりと快癒かいゆされたとい**う**。

このお薬師さまは、いまは西蓮寺においでじゃそ**うな**。



代官の難問



八王子の在に、もんじゃの吉と呼ばれる、たいそう利口もんがおった。ある年の取り入れじまいに、名主どのが、もんじゃの吉のところへあわただしく飛び込んできた。

「弱った、弱った。なんとか、いい知恵を貸しておくれ」

名主どのの話では、今年は雨が降らず、不作で、百姓衆が難儀をしているから、年貢米をまけてほしいと、代官に頼んだら、「わしが出す問題を、見事に解いたら、まけよう」と、難問を吹っ掛けてきた。

「こりに、すっかりよくにた二頭の馬がいるが、どちらが親馬で、どちらが子馬か、ぴったり当てる!」と、いうのじゃった。もんじゃの吉は、にっこり笑うと、「わけはない、二頭の間ににかいばおけを置いてやる。さきに食べるのが子馬で、あとから食べるのが親馬さ」と教えてやつた。

その年、村のお百姓衆は年貢米を軽くしてもらい、大助かりしたそうじゃ。

鶴の森さま

鶴の森は、明神の沼に、たくさんのかわいらしい鶴がやってきて森に巣をかけたので、鶴森明神といわれた。

上一分方村の鎮守で、祭神は、住吉さまじや。

天正のころ、柿本朝臣さまが、都から、この地に下つてこられたときよりの、尊い鎮守じゃった。「万民豊樂」といい、すべての人の幸せを守るので、悪人ばらには、

容赦なく、きびしい神罰がくだされたということじゃ。

あるとき、村に、三人の盗つ人が押し入つた。

三人は、まんまと、鶴森の宮まで逃れてきたが、そこで、急にのどが渴いた。「のどうるおしに……」と境内のなしをもいでくつた。

うまかっただそうじゃが、ところが……、そのまま、ピタリと、足が地にくつついで、動けなくなつた。

三人の盗つ人は、なんなく捕まつてしまつた。「なしを、くつたので……」と、悔しがつていたが、役人たちは首をかしげた。

鶴森の宮には、なしの木が、一本もなかつたからじゃ。

